

# 第二言語習得データから見た日本語の モダリティにおける「行為拘束的モダリティ」と 「認識的モダリティ」の関係についての考察

堀江 薫・玉地瑞穂

キーワード：モダリティ / 共時的類型論 / 文法化 / キュー / 連続性

## 1. はじめに

言語類型論的文法化研究によれば、モダリティを表わす助動詞などはモーダルマーカ（modal markers）と呼ばれ、1つの形式で2つ以上の意味・機能を持つ多義性（polysemy）は類型論的に異なる言語間で確認されている。この多義性に関しては、義務や許可を表す「行為拘束的モダリティ（deontic modality）」と話者の命題に対する事実性を表明する「認識的モダリティ（epistemic modality）」の間の多義性について論じられる。そして、この多義性はメタファー的マッピングによって「行為拘束的モダリティ」から「認識的モダリティ」が派生したものであることから、「行為拘束的モダリティ」の方が中核的な用法であると考えられている（Sweetser 1990）。

しかし、日本語においては「行為拘束的モダリティ」と「認識的モダリティ」が別の形式で表されているもの（「べきだ」・「はずだ」と「なければならない」・「にちがいない」）と、2つのモダリティが1つの形式で表されるが「認識的」用法の方が中核的であると考えられるもの（「ものだ」）が存在する。本研究では「共時的類型論」の概念に基づき、第二言語習得の事例研究の分析結果からこれらの日本語のモダリティの「行為拘束的モダリティ」と「認識的モダリティ」の関係の考察を行う。

筆者（堀江・玉地）はこれまで「共時的類型論」の概念に基づいて、「べきだ」・「はずだ」と「なければならない」・「にちがいない」の関係の分析（Tamaji & Horie 2007a）や「ものだ」の「行為拘束的」用法と「認識的」用法の関係の分析（Tamaji & Horie 2007b）を行ってきた。Tamaji & Horie（2007a）では、2つの別の形式で表される「行為拘束的モダリティ」と「認識的モダリティ」の関係の分析を行い、Tamaji & Horie（2007b）、では、1つの形式が「行為拘束的モダリティ」と「認識的モダリティ」として機能する「ものだ」の2つの用法の関係の分析を行った。本研究は、これらの研究成果を基に「行為拘束的モダリティ」と「認識的モダリティ」が2つの別形式で表されるものと1つの形式で表されるものの類似点と相違点を分析することで、日本語のモダリティ体系における「行為拘束的モダリティ」と「認識的モダリティ」の関係を分析する

という点でこれまでの研究と異っている。また、本研究で用いた第二言語としての日本語のモダリティの習得の詳細な分析については玉地・堀江（2007c）に、共時的類型論研究の詳細については玉地・堀江（2008）に参照されたい。

本研究の構成は以下のとおりである。第2節では日本語の「行為拘束的モダリティ」と「認識的モダリティ」の類型論的特徴について述べ、第3節では本研究の理論的枠組みである共時的類型論について述べる。第4節では調査方法、第5節では調査結果の分析、第6節では調査結果から日本語の「行為拘束的モダリティ」と「認識的モダリティ」の関係の分析を行う。

## 2. 日本語の「行為拘束的モダリティ」と「認識的モダリティ」の類型論的特徴

本研究で対象とするのは、「べきだ」・「はずだ」、「なければならない」・「にちがいない」と「ものだ」である。「べきだ」は英語の *Should* や中国語の *Yinggai*<sup>1</sup> の「行為拘束的」用法、「はずだ」はそれらの「認識的」用法に相当する。「なければならない」は英語の *must* や中国語の *Yao4* の「行為拘束的」用法、「にちがいない」はそれらの「認識的」用法に相当する。このように、他の言語では2つのモダリティが1つの形式で表されるのに対し、日本語では別の形式で表されると言うのが日本語のモダリティの類型論的特徴の1つである。

一方、「ものだ」は「行為拘束的」用法と「認識的」用法を持つモーダルマーカである。2つの用法の関係は以下のように説明される。例(1)は「ものだ」の「当然・常識」の用法、(2)は「助言、軽い助言を表す」の用法と考えられるが、これらはそれぞれ(1)は「認識的」用法、(2)は「行為拘束的」用法と考えられる。

- (1) 練習すれば、ギターが弾けるようになるものだ。 (当然・常識)
- (2) 「試験に合格したかったら、一日三時間は勉強するものだ。」 (助言、軽い命令)

(1)の用法と(2)の用法は、「もの」の持つ「一般性」((1)の用法)が語用論的に用いられ、「(一般的にそうなだから)あなたもそうするべきだ」という当為判断の意味が付加され、(2)の用法になったことが報告されている(坪根 1994, Fujii 1999)。

これらのことから、「ものだ」の(1)の用法と(2)の用法の関係は多義的であるが、「認識的」用法から「行為拘束的」用法が派生したと考えられる。

以上のことから、日本語の「行為拘束的モダリティ」と「認識的モダリティ」の関係は、言語類型論的に多くの言語で確認されているような「行為拘束的モダリティ」から「認識的モダリティ」への変化という方向性では説明できないと考えられる。

### 3. 理論的枠組み：共時的類型論 —第二言語習得と文法化の関係—

本研究では、第二言語習得データに基づき、これら3組のモーダルマーカーの間で、どちらのモダリティ／用法が中核的な用法であるかを分析する。このような、第二言語習得の結果から当該言語の文法化の方向性を類推する研究は「共時的類型論 (synchronic typology)」(Giacalone-Ramat 2003) と呼ばれる。

「共時的類型論」が提唱されるようになった背景には、文法化の「個体発生による系統発生の再生仮説 (the hypothesis that ontogeny recapitulates phylogeny)」(Gould 1977) という考え方がある。これは、文法化の意味変化の規則性という通時的文法化の過程と、個人の言語習得における多義性の習得順序の間に平行性が見られるという報告 (例: Slobin 1977, 1994) に基づく、個人の文法の習得過程に関する仮説である。つまり、この仮説は多義語の複数の用法の習得において、中核的な用法から周辺的な用法の順に習得が進むことを意味している。「共時的類型論」はこのような特徴に基づいて第二言語習得における多義語の習得順序から目標言語の多義語の発展順序 (文法化の方向性) を類推するというものである。本研究ではこの概念に基づき、3組のモーダルマーカーの習得において、「行為拘束的モダリティ／用法」と「認知的モダリティ／用法」のどちらを先に習得するかによって、中核的なモダリティ／用法がどちらであるかを分析する。

### 4. 調査方法

被験者は中国語を母語とする学習者 60 名で、それぞれ 20 名からなる初級、中級、上級の3つのグループに分類した。このグループ分けは、プレテストとして行った日本語能力試験2級の文法問題の結果、正解率によって上級 (正解率 80%以上)、中級 (正解率 60~80%)、初級 (正解率 60%以下) に分類した。

被験者は、与えられた文章を読んで文脈を意味する適切なモーダルマーカーを含むものを選択する。それぞれの問題には4つの選択肢があり、そのうち2つは競合するモーダルマーカーから成る文章である。(3) は問題例の1つである。

(3) 「健康のためには体重を ( )。」

- |           |           |
|-----------|-----------|
| 1. 減らすはずだ | 2. 減らすわけだ |
| 3. 減らすべきだ | 4. 減らすようだ |

この例では被験者に「健康のためには体重を」に続くのに最も適切なモーダルマーカーを含む文を次の1~4から選んでもらう。この選択肢の1の「はずだ」と3の「べきだ」はともに中国語の *Yinglgail* の「行為拘束的」用法と「認知的」用法に対応するので、競合すると考えられる。

このような問題を「べきだ」・「はずだ」に関する問題と「なければならない」・「にちがいない」に関する問題、「ものだ」の「行為拘束的」用法と「認知的」用法に関する問題を各20問用意し、初級、中級、上級のそれぞれのグループの正解率を集計した。また、正解のモーダルマーカ、正解と競合するモーダルマーカ（例えば「べきだ」が正解の問題では「はずだ」）、その他のモーダルマーカの選択に関して学習段階によって差が見られるか、またそれぞれの学習段階において選択するモーダルマーカに差が見られるかを、有意差検定を用いて検査した。

このタスクは競合モデルに基づいたタスクなので、競合モデルについての簡単な説明を行なう。競合モデルとは機能主義文法に基づく仮想的な発話処理モデルで、表面の言語形式と下部構造の意味・機能との関係、つまりマッピングを直接的に説明する。そして、語順や語彙的・意味的人称性、プロソディや形態論的マーカなど、話者と聞き手の間で用いられるマッピングを関係付けるすべての情報は「キュー (cues)」と呼ばれる (MacWhinney 1992)。このような理解に立てば、キューは形式と意味の両方を意味するが、このモデルは文章処理の理解に焦点を当てているので、キューとは普通表面的な言語形式のことを意味する。

競合モデルの利点は、①形式と意味・機能のマッピング関係を直接的に説明できるので、マッピングが1対1でなく、同じキューが違う機能を表現する場合、つまりマッピングが1対2の場合に適用できる。②同じキューが違う機能を表現することから、キューの相対的な強さの違いを利用して、第二言語習得の段階を分析できるということである。以上の2つの利点を生かして、第二言語習得段階における第一言語の転移や中間言語の発達の様子を分析できると考えられる (Bates & MacWhinney 1981)。

先述したように、「べきだ」は中国語の *Ying1gai1* の「行為拘束的」用法、「はずだ」はその「認知的」用法に相当し、「なければならない」は中国語の *Yao4* の「行為拘束的」用法、「にちがいない」はその「認知的」用法に相当する。一方、「ものだ」の「行為拘束的」用法は *Ying1gai1* の「行為拘束的」用法に相当するが、「ものだ」の「認知的」用法は *Ying1dang1* に相当すると考えられている。このように、3組のモーダルマーカは母語である中国語と目標言語である日本語において形式と意味・機能のマッピングが異なっている。このことから、先述したような競合モデルの特徴が本研究の習得調査には有効であること、またキューの相対的な強さを利用することで、習得調査において第一言語転移や中間言語の発達の様子も分析できると考える。

## 5. 調査結果

本節では、習得調査の結果を述べる。初めに「べきだ」・「はずだ」と「なければならない」・「にちがいない」の習得調査の結果、次に「ものだ」の「行為拘束的」用法と

第二言語習得データから見た日本語のモダリティにおける「行為拘束的モダリティ」と「認識的モダリティ」の関係についての考察

「認識的」用法の習得調査の結果を述べる。さらに、「ものだ」の習得調査の分析で用いたローカルキューとグローバルキューの観点から「べきだ」・「はずだ」と「なければならない」・「にちがいない」の習得調査の分析を行う。

### 5-1. 「べきだ」・「はずだ」と「なければならない」・「にちがいない」の習得結果

以下の図1から図4はそれぞれのモーダルマーカーを正解とする問題の回答結果を学習者のグループごとにまとめた図である。

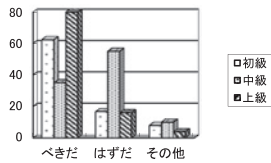


図1 「べきだ」を正解とする問題の回答結果

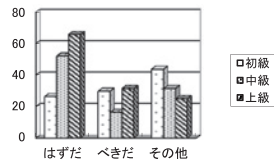
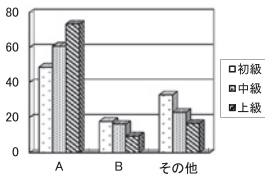
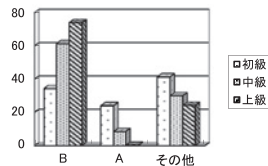


図2 「はずだ」を正解とする問題の回答結果



A: なければならない B: にちがいない

図3 「なければならない」を正解とする問題の回答結果



A: なければならない B: にちがいない

図4 「にちがいない」を正解とする問題の回答結果

この調査の結果は、「べきだ」・「はずだ」の習得結果は以下のように要約することができる。①初級学習者は「べきだ」を正解とする問題でも「はずだ」を正解とする問題でも「べきだ」を選ぶ傾向がある。②中級学習者は「べきだ」を正解とする問題でも「はずだ」を正解とする問題でも「はずだ」を選択する傾向がある。③上級学習者になると「べきだ」を正解とする問題では「べきだ」を、「はずだ」を正解とする問題では「はずだ」を選択できるようになる。④①は「行為拘束的モダリティ」の方が「認識的モダリティ」よりも中核的である母語の中国語の影響である。⑤②の「はずだ」の過剰一般化は中間言語段階を示している。

「なければならない」・「にちがいない」の習得においては、どのレベルの学習者も「なければならない」を正解とする問題では「なければならない」を、「にちがいない」を正解とする問題では「にちがいない」を選択していることがわかる。このことは、学習者は学習の初期段階から2つのモーダルマーカーが別の機能をしていることを認知し

ていることを示している。

### 5-2. 「ものだ」の習得

「ものだ」は1つのモーダルマーカで「行為拘束的モダリティ」と「認識的モダリティ」として機能する。したがって、「行為拘束的モダリティ」として機能するとき（「行為拘束的」用法）と「認識的モダリティ」として機能するとき（「認識的」用法）を区別する必要がある。「ものだ」の「行為拘束的」用法と「認識的」用法では言語形式（キュー）に違いが見られる。その違いをまとめたものが、下の表1と表2である。

表1 「行為拘束的」用法の「ものだ」のキュー

主語	明示的／暗示的 +意志性、+有生性
述部	動作動詞
否定	モーダルマーカの否定形（～するものではない）
テンス	モーダルマーカの過去形（～するものだった）
態	能動態

表2 「認識的」用法の「ものだ」のキュー

(真)主語 <sup>ii</sup>	話者
主題的主語	明示的／暗示的 ±有生性
述部	動詞、名詞、形容詞
否定形	モーダルマーカの否定形（～するものではない） 命題の否定（～しないものだ）
テンス	モーダルマーカの過去形（～するものだった） 命題中の述部が過去形（～したものだ）
態	能動態、受動態、可能形

表1、2から「行為拘束的」用法のキューに比べて、「認識的」用法のキューの方が多様性があることがわかる。「行為拘束的」用法のキューは「(明示的／暗示的な) 有生物の主語」と「動作動詞の原形」から成る。(4)はその例である。

(4) (当事者以外の者が)ケンカに口出しをするものではない

「認識的」用法のキューは「(明示的／暗示的な) 無生物の主語」と「動作動詞以外の動詞や動詞の否定形や過去形、形容詞や名詞及びそれらの否定形や過去形」が述部にくるという違いがある。(5)はその例である。

(5) 美容院は、月曜日は休みであるものだ。

このようなキューの違いは、「ものだ」の習得において学習者が2つの用法を区別する手掛かりになると考えられる。

しかし、「認知的」用法の「ものだ」の文には「行為拘束的」用法のものと同じキューからなる文、つまり「(明示的/暗示的な) 有生物の主語」と「動作動詞の原形」から成る文がある。(6)はその例である。

(6) 道路を渡るときは、左右を確認するものだ。

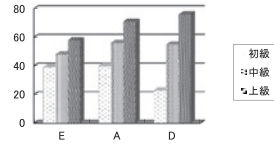
(6)は表層構造からだけでは「行為拘束的」用法なのか「認知的」用法なのか区別できない。そこで、本研究ではこのような表層構造のキューから成る「認知的」用法を「曖昧な」用法と定義した。そして、「曖昧な」用法と「行為拘束的」用法の違いは、「話し手がある特定の人物に対して行為の遂行を要求している場合」は「行為拘束的」用法、「話し手は一般的に人間がとるべき行為について言及している場合」は「認知的」用法を意味するという違いがある。つまり、「曖昧な」用法と「行為拘束的」用法の区別には表層構造ではなく「文脈(の違い)」がキューとなることを意味している。

「ものだ」の「行為拘束的」用法と「認知的」用法をキューに基づいて分類すれば、3つのキュー(用法)が存在する。「認知的」用法と「行為拘束的」用法のキューはそれぞれに固有のものや典型的なものであることから、キューによる区別は容易であり、「曖昧な」用法のキューは「行為拘束的」用法のキューとの違いを考慮しなければならないので、他のキューに比べて区別が難しいことが予測される。このことは、キューの種類によって文章処理量が異なること、つまりあるキューは少ない情報処理の労力しか要さないが、他のキューはより多くの労力を要することを意味している。

Kail (1989: 47)によれば、競合モデルにおいてキューは文章処理において必要とされる情報処理量によって「ローカルキュー (local cue)」と「グローバルキュー (global cue)」に分類される。ローカルキューとはローカル処理(1つの語彙的単語の範囲内で、句の中の他の言葉を考慮することなく言語学的キューの確認と解釈ができるもの)のみを要するもの、グローバルキューとはグローバル処理(1つの語彙的単語を選択する際に、競合する他の言葉を考慮する必要があるキュー)ものである。この定義によれば、「認知的」用法の「ものだ」に特有のキューと「行為拘束的」用法の「ものだ」に典型的なキューはローカルキュー、「曖昧な」用法のキューはグローバルキューである。

表1、2を基に「ものだ」の「行為拘束的」用法と「認知的」用法もキューによって区別することができる。また、「行為拘束的」用法と同じキューからなる「認知的」用法

の「ものだ」の文が存在し、このような文を「曖昧な」用法と定義することにした。図5はそれぞれの用法の正解率と学習段階の関係を示している。



E:「認識的」用法 A:「曖昧な」用法 D:「行為拘束的」用法

図5 「ものだ」のそれぞれの用法の回答結果と学習段階の関係

図5を基に、各グループの正解率をまとめると以下のようなになる。

- ⑥ 初級学習者 「認識的」 = 「曖昧な」 > 「行為拘束的」
- ⑦ 中級学習者 「曖昧な」 > 「行為拘束的」 > 「認識的」
- ⑧ 上級学習者 「行為拘束的」 > 「曖昧な」 > 「認識的」

⑥～⑧からわかることは、3つの用法の習得順序は「認識的」用法、「曖昧な」用法、「行為拘束的」用法の順である。

この結果をキューによって分析すると、初級学習者はグローバルキュー、中級学習者は「認識的」用法のローカルキュー、上級学習者はグローバルキューから文脈によって「曖昧な」用法と「行為拘束的」用法を区別できるようになるということがわかる。

### 5-3. ローカルキュー・グローバルキューに基づく「べきだ」・「はずだ」と「なければならない」・「にちがいない」の習得調査の分析

「ものだ」の2つの用法の習得調査から、情報処理に要する量によってキューが異なることがわかった。このローカルキューとグローバルキューという概念に基づいて、「べきだ」・「はずだ」と「なければならない」・「にちがいない」の習得調査の結果を分析する。

まず、「ものだ」の場合と同様、「べきだ」と「はずだ」のローカルキューとグローバルキューを確認する。「行為拘束的モダリティ」である「べきだ」に典型的なキューと「認識的モダリティ」である「はずだ」に固有のキューはローカルキュー、「べきだ」とおなじキューからなる「はずだ」の文をグローバルキューに分類することができる。ローカルキューから成るものは上記の表1、表2と同様のものになると考えられるので省略する。下の(7)はグローバルキューから成る文の例である。



(7) 火事の際は119番に電話するべきだ／はずだ。

(7) は暗示的な有生物主語、動作動詞の原型から成る文なので「べきだ」に典型的ではあるが、文脈によっては「はずだ」を使用してもいい。話し手がある特定の人物（しばしば聞き手）に対して発したものであるとすれば、話し手はその人物に対してある行為の遂行・禁止を要求するという意味で「行為拘束的モダリティ」の文となるが、話し手がある状況において、主語がある行為の遂行をすることが望ましいことを述べているなら「認知的モダリティ」の文である。したがって、このような構造の「はずだ」の文はグローバルキューから成る文と言える。

下の図6は「はずだ」のローカルキューから成る文の回答例をまとめたもので、図7は「はずだ」のグローバルキューから成る文の回答例をまとめたものである。

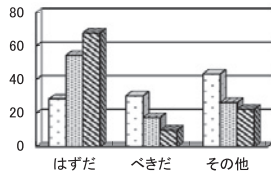


図6 「はずだ」のローカルキューを使用する問題の回答例

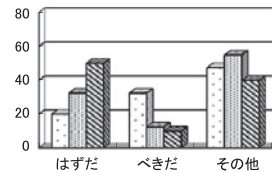


図7 「はずだ」のグローバルキューを使用する問題の回答例

図6、7から明らかなのは、初級学習者と上級学習者では、ローカルキューを使用する問題でもグローバルキューを使用する問題でも「はずだ」の選択率が変わらないのに対し、中級学習者ではローカルキューを使用する問題において「はずだ」を選択する割合が高い。つまり、中級学習者は他の段階の学習者に比べて、「はずだ」の習得においてローカルキューを使用していることがわかる。

初級学習者に関してはローカルキューを使用する問題でもグローバルキューを使用する問題でも「べきだ」を選択する割合が高いことがわかる。したがって、初級学習者は「はずだ」の習得に関してはキューを手がかりにするより、第一言語の知識を適用していると考えられる。

中級学習者はローカルキューを使用する問題の方がグローバルキューを使用する問題よりも正解率がかなり高く、有意差検定においても両者の間に有意差が見られた。

また、上級学習者はローカルキューかグローバルキューかに関わらず、「べきだ」ではなく「はずだ」を選択する割合が高いことから、上級学習者は「べきだ」と「はずだ」が使用される文脈の違いを理解していることがわかる。以上のことから、「べきだ」と「はずだ」の習得においては、グローバルキューの存在が習得を難しくしていることを示

唆している。

次に、「なければならない」と「にちがいない」のローカルキューとグローバルキューを分析する。これらも「行為拘束的モダリティ」である「なければならない」に典型的なキューと「認識的モダリティ」である「にちがいない」に固有のキューであるローカルキューが存在する。それらも上記の表1、2と同様のものになると考えられる。

ところが、「なければならない」と「にちがいない」の場合は、グローバルキューが存在しないことがわかった。例えば、上記の(7)の「べきだ」と「はずだ」を「なければならない」と「にちがいない」に置き換えると、次のようになる。

(8) 火事の際は119番に電話しなければならない。

(9) 火事の際は119番に電話するにちがいない。

(8)、(9)ともに暗示的な有生物主語と動作動詞の原形から成る文であるが、それぞれのモーダルマーカに接続する動詞の形式が異なっていることがわかる。このように、「なければならない」と「にちがいない」の間にはグローバルキューが存在しない。このことが、学習の初期段階から2つのモーダルマーカを別の機能をするものと認識できる理由ではないかと考えられる。

## 6. 習得調査から見た日本語の「行為拘束的モダリティ」と「認識的モダリティ」の関係

本節では、第5節の習得調査の結果を基に、「ものだ」の2つの用法の関係と「なければならない」と「にちがいない」の関係、「べきだ」と「はずだ」の関係の分析を行う。

### 6-1. 「ものだ」の「行為拘束的」用法と「認識的」用法の関係

「ものだ」の「行為拘束的」用法と「認識的」用法の考察を行う。注目すべきことは初級学習者が「行為拘束的」用法よりも先に「認識的」用法と「曖昧な」用法を習得することである。これらはキューの違いはあるがどちらも「認識的」用法であることから、「行為拘束的」用法よりも「認識的」用法の方が先に出現したことと一致している。次に、中級学習者は「曖昧な」用法の正解率が一番高い、つまり各用法の識別においてグローバルキューを多用することを示している。そして、初級学習者、中級学習者ともに「行為拘束的」用法よりも「曖昧な」用法を先に習得することから、まずグローバルキューを使用するものを習得し、グローバルキューを基に語用論的に用いられているも

第二言語習得データから見た日本語のモダリティにおける「行為拘束的モダリティ」と「認知的モダリティ」の関係についての考察の「行為拘束的」用法として区別するというストラテジーを使用していると考えられる。

以上のことから、「ものだ」の「行為拘束的」用法と「認知的」用法の関係は、「認知的」用法から「行為拘束的」用法が派生し、両者の間には中核的意味特性が存在すると考えられる。

### 6-2. 「なければならない」・「にちがいない」の関係

習得調査の結果「なければならない」と「にちがいない」に関しては、学習の初期段階から「なければならない」が正解のときは「なければならない」を、「にちがいない」が正解のときは「にちがいない」を選択していた。習得順序から見れば、学習者は「なければならない」と「にちがいない」のどちらを先に習得したということではなく、両者をほぼ同時に習得したということであり、つまり比較的初期段階から2つのモダルマーカを別の機能を表すものと認知していたことを意味する。

キューによる分析を試みたが、2つのモダルマーカの間にはローカルキューは存在するがグローバルキューが存在しないことから、2つのモダルマーカの区別は容易であることが確認できた。しかし、2つの間にグローバルキューが存在しないということは、2つのモダルマーカの間には共通の領域が存在しないということを示している。つまり、2つのうちどちらかが中核的なモダリティであるということはないということであり、両者は不連続のカテゴリーであるということである。

### 6-3. 「べきだ」・「はずだ」の関係

「べきだ」と「はずだ」に関しては、初級学習者は「べきだ」が正解のときも「はずだ」が正解のときも「べきだ」を選択し、中級学習者は「べきだ」が正解のときも「はずだ」が正解のときも「はずだ」を選択する割合が高く、上級学習者は適切な選択をしていたという結果を得た。さらに、キューによる分析から、初級学習者は「はずだ」のローカルキューに気づかず「べきだ」を選択していたこと、このことは中国語の *Yinglgail* の「行為拘束的」用法が中核的であるという知識を転移していたものであるという知見を得た。中級学習者は「べきだ」のローカルキューと「はずだ」のローカルキューを使用する問題での正解率が高いが、グローバルキューを使用する問題では「はずだ」を選択する割合が高いということがわかった。このことは、グローバルキューが存在する、つまり「行為拘束的」モダリティと「認知的」モダリティの間で同じキューが存在するという中国語では見られない現象のため、日本語において獲得した新しい知識を過剰一般化したためであるという知見を得た。

初級学習者は第一言語転移であるから排除し、中級学習者から日本語の「べきだ」と

「はずだ」の影響が現れているとすると、中級学習者の「はずだ」の過剰一般化は両者の間において「はずだ」の方がプロトタイプ的であるということを示唆していると考えられる。そして、過剰一般化がグローバルキューの問題に見られることから、グローバルキューを用いる文が両者の間の中核的意味を表していると考えられる。このようなグローバルキューを用いる文の特徴は、「べきだ」と「はずだ」で同じ表層構造からなる文（有生物の主語+動作動詞の原型+「べきだ」／「はずだ」）である。これは、先述した「ものだ」の「曖昧な」用法と同様、このような文に接続するモーダルマーカ―として「べきだ」か「はずだ」を選択する時には、話者が文中の主語に対してある行為の遂行を要求している場合（語用論的に使用されている場合）は「べきだ」、話者は文中の主語のある行為の遂行を記述しているだけの場合は「はずだ」を選択するというように、文脈によって判断しなければならない。つまり、グローバルキューを使用する「はずだ」の用法は「ものだ」における「曖昧な」用法の領域であり、両者の間の中核的意味であると言えよう。したがって、「べきだ」と「はずだ」の関係は「ものだ」の2つの用法の関係に類似していると言える。

## 7. まとめ

以上の3組のモーダルマーカ―の習得から「行為拘束的モダリティ」と「認識的モダリティ」の関係を類推したところ、「なければならない」と「にちがいない」と「べきだ」と「はずだ」、「ものだ」の2つの用法の関係を図で表すと次のようになる。

図8 キューから見た「ものだ」の用法の関係

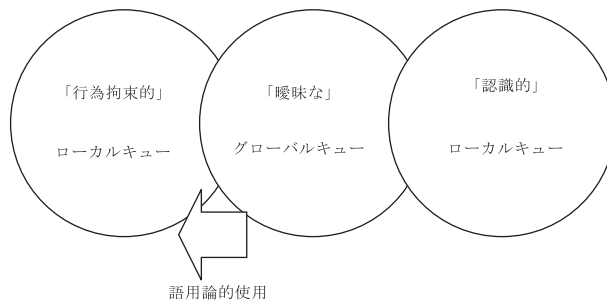


図9 キューから見た「べきだ」と「はずだ」の関係

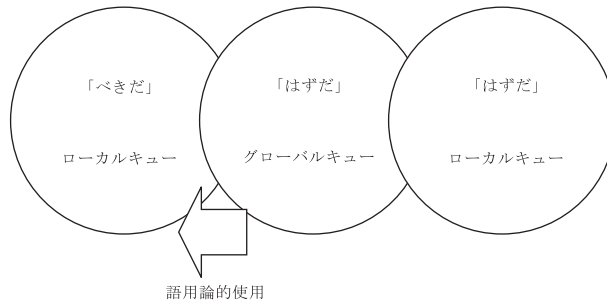


図10 キューから見た「なければならない」と「にちがいない」の関係



3組のモーダルマーカの習得結果において、興味深いことは「べきだ」と「はずだ」の関係である。「べきだ」と「はずだ」は「なければならない」と「にちがいない」同様、「行為拘束的」と「認識的」のモダリティが別のモーダルマーカで表現される。したがって、モダリティのカテゴリー化という点では「なければならない」と「にちがいない」と類似しているが、キューによる分析では「ものだ」と類似している。つまり、「なければならない」と「にちがいない」の間にはグローバルキューが存在しないが、「べきだ」と「はずだ」、「ものだ」の「行為拘束的」用法と「認識的」用法の間にはグローバルキューが存在するという違いがある。したがって、本研究での調査の結果、「行為拘束的モダリティ」と「認識的モダリティ」の関係において、グローバルキューがあれば2つモダリティの間に連続性があり、グローバルキューがなければ2つのモダリティは不連続のカテゴリーであるという知見を得た。

## 参考文献

- Bates, E. and B. MacWhinney (1981). Second language acquisition from a functional perspective: pragmatic, semantic, and perceptual strategies. In H. Winitz (ed.) *Annals of Science Conference on Native and Foreign Language Acquisition*. New York.: New York Academy of Sciences. 198-219
- Fujii, S. (1999). What can 'things' ('mono') do for propositional attitudes in Japanese discourse. In J. Verschueren. (ed.) *Pragmatics in 1998: Selected Papers from the 6th International Pragmatics Conference 2*. 159-171.
- Giacalone-Ramat, A. (2003). (ed.) *Typology and Second Language Acquisition*, Berlin: Mouton de Gruyter.
- Gould, S.J. (1977). *Ontogeny and Phylogeny*, Cambridge, M.A: Belknap.
- Kail, M. (1989). Cue validity, cue cost, and processing types in sentence comprehension in French and Spanish. In B. MacWhinney. and E.Bates. (eds.) *The Crosslinguistic Study of Sentence Processing*. New York: Cambridge University Press. 21-54.
- Li, R.Z. (2003) *Modality in English and Chinese: A Typological Perspective*, Amsterdam.: Lighting Source Incorporation.
- MacWhinney, B. (1992). Transfer and competition in second language learning. In R. Harris (ed.) *Cognitive Processing in Bilinguals*. Amsterdam: Elsevier. 65-82.
- Slobin, D.I. 1977. Language change in childhood and in history. In J. Macnamara (ed.) *Language Learning and Thought*. New York: Academic Press. 185-214.
- Slobin, D.I. 1994. Talking perfectly. discourse origins of the present perfect. In W. Pagliuca (ed.) *Perspective on Grammaticalization*. Amsterdam: John Benjamins. 119-123.
- Sweetser, E. (1990). *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge.: Cambridge University Press.
- Tamaji, M. and K. Horie. (2007a) What L2 learners' processing strategy reveals about the modal system in Japanese: a cue-based analytical perspective. In The Korean Society for Language and Information (eds.), *Proceedings of the 21<sup>st</sup> Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation*. 471-480.
- Tamaji, M. and K. Horie. (2007b) What L2 acquisition data reveals about the directionality in grammaticalization: a case of Japanese modal marker *mono-da*. In The Discourse and Cognitive Linguistics Society of Korea (eds.) *Proceedings of the 3<sup>rd</sup> Seoul International Conference on Discourse and Cognitive Linguistic*. 470-480.
- 玉地瑞穂・堀江 薫 (2007) 「中国人日本語学習者のモダリティ習得過程に見られる」中間言語：意味・形式のマッピングの観点から」南雅彦 (編) 『言語学と日本語教育V』くろしお出版. 53-71.
- 玉地瑞穂・堀江 薫 (2008) 「第二言語習得データに見る「ものだ」の文法化の方向性：共時的類型論の観点から」関西言語学会 (編) *Proceedings of KLS (Kansai Linguistic Society)* 28. 34-43
- 坪根由香里 (1994) 「『ものだ』に関する一考察」『日本語教育』84. 65-77.

---

<sup>i</sup> 本研究では、中国語の表記はアルファベットと声調を表す数字による表記を行う。数字の意味は

第二言語習得データから見た日本語のモダリティにおける「行為拘束的モダリティ」と「認知的モダリティ」の関係についての考察

以下のとおりである。1：第一声（高平音）妈 mā、2：第二声（上昇音）麻 má、3：第三声（低平音）马 mǎ、4：第四声（下降音）骂 mà。

<sup>ii</sup>（真）主語とは、命題に対する意見を述べている人物のことを意味する（Sweetser 1990）。